

自由論題 第一報告
『法の精神』における〈気品 politesse〉 —— 自己愛と社交性 ——

増田都希（一橋大学）

報告要旨

これまでの研究で、『法の精神』のマナー論が注視されてきたとは言い難いが、報告者によれば、そこに注目すべき理由が三点ある。第一に、モンテスキューは「法と習俗」の二項対立にマナーという第三の視座を導入した点、第二に、にもかかわらず、作品中の体系的なマナー論の存在が捉えにくい点、第三に、功利主義的観点からのマナー擁護論が力を増す18世紀において文明論からのマナー批判を行い、のちの議論を準備したと考えられる点である。

本報告では、『法の精神』のマナー論を捉える一助として、以下の一節に注目する。

「この点で〈行儀作法 civilité〉は〈気品 politesse〉に優る。〈気品〉は他人の悪徳におもねるが、〈行儀作法〉は我われの悪徳を表沙汰にするのを防ぐ」(XIX, 16、括弧は筆者)。

(行儀作法は専制政体中国のマナーを、気品は君主政フランスのマナーを指す)。

モンテスキューのマナー論の代表的な研究として、C. スペクトールの議論がある。彼女によれば、フランスの〈気品〉とイギリスの「商業」は共に近代の象徴であり、「古代の徳から、自由な commerce (交際・商業) へ」という主張が第19編に通底するという。モノとモノとの交換である「商業」と、言動や心情の交換である「交際」を、私欲を原動力として文明化を牽引する二つの交換活動と捉えた彼女の議論は秀抜である。他者からの敬意や評価を望む個々人の自己愛が、結果的に公益(秩序、幸福、人間精神の発達…)を実現するという功利主義的マナー論は18世紀のトレンドで、モンテスキューの〈気品〉にもその影響は確かに看取される。

しかしながら、スペクトールの図式に収まらないのが先の一節である。彼女の図式では、同じく第19編で詳述される中国の〈行儀作法〉は必然的に後景に退き、その〈行儀作法〉に〈気品〉が劣る理由は説明できない。加えて、第5-7章には〈気品〉礼賛の言説が溢れているだけに不可解な一節であり、その真意を巡って異なる見解が示されてきた。そこで本報告では、中国とフランスのマナーに言及した「わが随想」1270、1271と照合することで、モンテスキューが〈気品〉の欠陥として指摘したものの解明を試みたい。

『法の精神』ではマナーを意味する三つの関連語 (les manières, la politesse, la civilité) が用いられているが、邦訳書においては個々の語の意味も、三者の関係性も不明瞭なままである。語彙の整理と『法の精神』のマナー論の全体像の提示を行いつつ、上記の問いへの答えを示したい。

自由論題 第二報告 シイエスの社会技術論

長谷川拓彌 (名古屋大学)

報告要旨

本報告ではフランス革命期の文献にしばしば現れる社会技術 (art social) に注目し、この概念の提唱者であったシイエスとコンドルセによる社会技術論を明らかにすることを目的とする。

旧体制の制度改革を論じたフィジオクラートはフランス革命で中心的な役割を担う人々にも大きな影響を与えていた。社会技術もフィジオクラートから引き継がれた概念であり、もともとこの言葉はフィジオクラートの N.ボードーが初めて用いたとされる。フィジオクラートはケネーに従って自然法に基づく支配を主張し、税制を含む当時の諸制度の改革を提言していた。

この中でもボードーは 1766 年の時点で『市民日誌』でロシアの文明化を取り上げて、君主による介入政策に注目し、彼がフィジオクラートに本格的に加わった後の 1771 年に出版された『経済哲学序説』においては、ケネーの議論を引き継ぎつつ社会技術の概念を提唱した。

チュルゴ改革期の経験などからフィジオクラートの影響を受けていたコンドルセは、シイエスと共に革命期に『社会教育誌』などで社会技術の重要性を主張した。しかし彼らは社会技術の語をボードーと同様の意味で使用したわけではなかった。

例えばコンドルセは 1780 年代前半には自然科学と道徳科学に同じ方法を適用できると想定しており、適切な科学的方法により自然科学と道徳科学が同程度の蓋然性を獲得するだろうと考えていた。彼はこうした自然科学の方法を前提として、確率論の現実の政治的事象への応用などと共に社会技術を語ろうとした。

他方コンドルセとともに活動したシイエスが革命前に出版した『投票方法に関する意見』(1789) からは、シイエスが自然科学と道徳科学の方法の差異について自覚的であったことがわかる。シイエスは主に特権階級を中心とした、歴史的な文書の中に政治的権威の正統性を求める人々を批判し、それに対抗するものとして社会技術を「組み合わせの科学」(sciences de combinaison) と呼びつつ、国制に関する議論に直接結びつけようとした。そして、あるべき国制をもたらすための社会技術の方法は、自然科学の方法である観察にとどまるものではないことを主張していた。

シイエスとコンドルセは社会技術により科学に基づく政治の推進という目標の下で共に活動したが、自然科学と道徳科学の共通性を自明のものとしたコンドルセに対して、シイエスは自然科学と道徳科学の方法の違いにより注目していた。

共通論題
ルソーという問い：感覚の論理、真理の政治
—— 内と外をつなぐもの ——

佐藤淳二（京都大学）

概要

ありきたりの言い方かもしれないが、カントをひとまずおけば、ジャン＝ジャック・ルソーほど18世紀ヨーロッパの問題を、私たちの身近なものとして感じさせる思想家・文学者はいないかもしれない。時代の大きな転換点に差しかったこの21世紀と18世紀を橋渡しするかに見えるルソー。そのルソーに、ここで一つの問いかけを試みるのも、意味のないことではないだろう。問いかけたいのは、混沌とした外界の混乱を生き抜くために、内面の深いところに帰るといって「道徳」を説きながら、普遍性ないし一般性を基盤にした思想を展開することがいかにして可能だったのか、ということである。一言で言えば、「内」と「外」を切断するかに見える思考が、実は「内」と「外」を様々な水準で（再）接合できたと思えるのはなぜか、である。

かつてならば、「形式」の「普遍性」を掲げたり、一般性による「同一性」を断じることで、この問いは「解決」されたのかもしれない。しかし、今や問いそのものが新しい局面に置かれ、かつてのような答えの有効期限が切れつつあるように見える。そこで、このセッションは、二部構成によってこの新しい局面の輪郭を示すことにした。

第一部 内と外をつなぐもの (I) : 他者との関係

第一部では、若手研究者によって、主に二つのテーマが語られるであろう。すなわち

① 認識と実践（道徳）、② 他者への伝達の問題とエクリチュールの問題、である。感覚、信、（内的）感情などの次元で、内に「ある」はずのものが外に「ある」はずのもの、つまりは他者と繋がる。このあたりから、新進気鋭のルソー研究者に、これからの研究の展望を含めて存分に語ってもらおう。三方は、ご存知のように、永見文雄・小野潮・鳴子博子編『ルソー論集（中央大学人文科学研究所研究叢書）』、中央大学出版部、2021年という最新のルソー論集の一つで、すでにこのテーマについて洞察を展開されているので、それを踏まえての議論を期待できる。

第二部 内と外をつなぐもの (II) : 真理と権力

後半では、政治に照明を当てることになる。内と外をつなぐもの、あるいは貫くものとしての真理は、他者に有無を言わせぬ行動の変更を迫る。つまりは権力そのものである。自己と他者の真理を介しての関係は、権力の行使という様相を示す。啓蒙はそもそもそのような権力の政治学の歴史に刻まれる運動である。そこからルソーを理解する必要があるだろう。鍵となるのは、あまりにも誤解・誤読されることの多いレオ・シュトラウスの政治理論ではないだろうか。とりわけ『世界の夜—非時間性をめぐる哲学的断章』、航思社、2021年で、政治哲学を鋭く問うている布施哲氏が、ルソーとレオ・シュトラウスに関して問題を提起する。最後に、佐藤淳二が、ルソーの政治論についてアプローチを試みる。

以上が、共通論題セッションの概要となる。セッションとしての充実を期したい。

共通論題「ルソーという問い」第一報告

感じることと伝えること

菅原百合絵（東京大学大学院）

報告要旨

その遅いデビュー以来、ルソーは一貫して読者へいかにして真理を伝達するかという「方法」を模索しつづけた哲学者だった。興味深いのは、彼がとりわけ「自分にとっての」真理を伝達することに強いこだわりを示したことである。自分の確信、自分の感じていることを伝えるにはどうすればよいのか、という問題意識が彼の自伝作品には通底して見られる。

自伝的作品のみならず、彼の哲学においても、感覚の個別性と伝達の困難さの問題系が見いだされる。本発表では、ルソーが『道徳書簡』および「サヴォワの助任司祭の信仰告白」のうちで使っている〈内的感覚 *sentiment intérieur*〉という用語を手がかりに、感覚と伝達の問題についてあらためて考えてみたい。「内的証言」と言い換えられることもあるこの表現は、個別性と普遍性、「内」と「外」の両方の側面を併せ持ち、それらの両極を「つなぐ」役割を果たすものである。さらにルソーはこの二つのテストのうちで、心の内なる声、内的な確信であるようなこの「内的感覚」を「内的証言」とも言い換え、真理を説得する手段にもしている。この用語の分析は、ルソーがデカルトやマルブランシュといった彼以前の哲学者たち、あるいは神学的な伝統といった過去の議論を彼がいかにして吸収し、組み換え、自己の文脈に吸収していったかを教えてくれる。さらにこのテーマは、マッソンをはじめとする感情主義的読解と、ドラテに代表されるようなより理性主義的読解との対立を解きほぐす一助ともなるだろう。

最後にわたしたちは再び彼の自己のエクリチュールへと立ち戻って、より内密で個人的な感覚の伝達の問題を検討したい。ルソーの遺作『孤独な散歩者の夢想』には、「存在の感覚」という表現が登場する。「内的感覚」としばしば同一視されてきたこの表現のうちには、感覚の新たなレイヤー、彼の新しい戦略を見て取ることができる。『夢想』のいくつかの文章は、内奥から湧き出してくるように思われる純粋な「存在の感覚」も、「内的感覚」とは別の仕方ですら「内と外をつなぐ」ことを可能にしてくれるものだということを教えてくれるのである。

共通論題「ルソーという問い」第二報告
懐疑の回帰 —— 『道徳書簡』後半をどう読むか ——

飯田賢穂(青山学院大学)

報告要旨

ルソーが1757年末から1758年初頭に書いた『道徳書簡』と呼ばれる手稿は、その後半部分が『エミール』第四巻の挿話「サヴォワ助任司祭の信仰告白」(以下「信仰告白」)の原型として使われている。そのため両著作には重複する文章や共通の論点がある。例えば、倫理学の古典的主題である幸福とは何か、あるいは幸福に生きるための「道徳の規則 (règles de morale)」(『道徳書簡』「第一書簡」)とはどのようなものなのかという問いである。幸福の探究は両著作の論展開の主軸となっている。また、この問いに答える方法として「形而上学」が懐疑的視点から検討され、有効な方法として内省が提案されるなど、両著作には大枠で重なる部分がある。本報告では、この重なる部分に見出される表現の違いに着目し、つぎの問いに答えることを目指す。すなわち、『道徳書簡』で展開する道徳論に、「道徳の規則」の説明方法として、なぜ「自己のエクリチュール」(菅原百合絵)が導入されたのかという問いである。この問いに三つのステップで答える。

まず、『道徳書簡』前半で展開される「形而上学」に対する懐疑がどのようなものであるかを概観する。具体的には、ジョン・ロックの『人間知性論』の性質論をとりあげ、そのどこにルソーは限界を見ていたのかを確認する。

つぎに、「道徳の規則」を捉える方法に関するルソーの説明を検討する。すなわち、「規則」の正しさを論証することで相手を説得するのではなく、「あなたを納得させるはずの唯一の論理を、私〔ルソー〕が引き出したいのは、あなたの心の奥底からなのです。それゆえに、私は自分の心の奥底に起こっていることをあなたに語るのです」(「第四書簡」)と提案されている説明方法について、「自己のエクリチュール」という概念を援用しながら検討する。ここで「信仰告白」の並行箇所と比較することで、道徳論の基本構造を明確にすることができると考えられる。すなわち、①「規則」を具体的に設定することと、②「規則」の拘束力について考察すること、という二つの要素から成り立つ構造である。

①具体的な「道徳の規則」それ自体は、「自己のエクリチュール」という説明方法の対象となり、『道徳書簡』後半から「信仰告白」へとルソーが執筆を進める中で、きわめて特殊個人的で、根本的には一般化不可能な次元に属するものとなってゆく。他方で、②「規則」の拘束力についての考察は、『エミール』を執筆する中で深められ、約束モデルと呼びうる説明モデルに発展する。①と②の区別に基づきながら、報告の最後で、「自己語りのエクリチュール」が道徳論に導入された理由について仮説を示し、そこからさらに『道徳書簡』前半で展開された懐疑とはまた別の懐疑がルソーの道徳論の中に設定できることを示す。

共通論題「ルソーという問い」第三報告 助任司祭の共同体

淵田仁（城西大学）

要旨

ルソーの『エミール』第四巻に挿入された「サヴォワ助任司祭の信仰告白」（以下、「信仰告白」）の理論的位置づけや解釈はこれまで幾度となく議論されてきた。具体的に言えば、そのテキストはルソーの宗教観が滲み出たものであり、そこでは良心を軸とした自然宗教が称えられ、啓示宗教が批判される。これが通常の「信仰告白」の読み方であろう。そして、この「信仰告白」は『社会契約論』の市民宗教論の議論と重ね合わせられ、ルソーの異端性を如実に示すテキストとして私たち読者に差し出されることになる。

しかし、事態は単純ではない。というのも、「信仰告白」の物語構造は『エミール』執筆過程において少しずつ構築されたものであり、ゆえにそこにルソーの思想が直裁的に表現されていると考えることは単純すぎる読み方ではないか。この執筆過程そのものが助任司祭が語る信仰告白の特色を示していると主張するのが本発表のひとつの目的である。

また、本発表で指摘したいことは「信仰告白」は助任司祭の独白ではないという点である。つまり、彼の告白には聞く者が舞台装置として設定されている。この〈聴く-聴かせる〉という構造によってこそ、助任司祭の信仰告白が有効な告白となっているのであり、そしてこの構造が共同性を生み出していると言える。

この共同性はルソーの政治思想（とりわけ契約による共同体）とどのように関係するのだろうか。社会契約（の可能性と不可能性）の思想家とルソーが呼ばれるとすれば、この助任司祭が告白によって為そうする共同体とは一体なんなのか。こうした問題を本発表で検討したい。

共通論題「ルソーという問い」第四報告
孤独な夢想者の散歩——あるユダヤ人哲学者が見たルソー——

布施哲(名古屋大学)

報告要旨

非常にしばしば、政治哲学と哲学との入り組んだ関係性への目配りが然してなされることもなく、統治や支配にかかわる抽象的思考といった類いの雑駁な境界線の内側で“ルソーの政治哲学”なるものが語られる。「社会契約」、「一般意志」、「市民宗教」等々の諸概念が西欧近代市民社会黎明期における基本原理の一端もしくは“理念”として、高等教育機関の教科書に「ジャン＝ジャック・ルソー」の名とともに紹介されるのである。そこではあたかも、当の市民社会から放逐された夢想者、しかし晩年は、まさにその孤独のうちにこそ最大の悦びを見出して植物学に専念した世捨て人は、若かりし頃から病的性向を持ち合わせていた解離性同一性障害者のみじめで物静かな片割れ、ただ「そっとしておいてあげればよい」だけの無力で無害なジキルの扱いを受けているかのようである。

ルソーの誠実な読者たちであれば、たとえば彼の仕事の情動的、疎外論的な一面を殊更に採りあげて政治的ロマン主義や革命主義やらへの萌芽へと収斂させることにも、あるいは逆に、その問題点をも含めて現代民主主義の“理念型”を考案した偉大な政治思想家のひとりとする紋切り型に収めてしまうことにも満足しないだろう。他方、しかし、ルソーの相反する思想傾向がわれわれを困惑させ続けたことも事実である。「公民」としての社会構成員各々の意志が主権者のそれであり、それゆえ彼らの“自由”は立法への参加によってこそ実現されるというフィクションを打ち出したルソーと、思考する(penser)よりも夢想する(rêver)ことに“真の自由”を実感していたルソーとの懸隔に多くの読者は難儀することを強いられてきたのである。いったい、それぞれの「自由」のあいだには階調のようなものがあるのか、あるいはそれらは、公的自由と私的自由のようなものと解釈すべきなのか、だとすれば、治者と被治者の一致を基礎にした彼の包括的“自由”のフィクションははじめから破綻していたのか——。あるいはまた、法によっては完全に担保されることのない共同体の共同性を支える「信」をめぐる、ルソーが「市民宗教」よりも原始的、“自然的”共同体の信仰を好んでいるように見えるのはなぜか。それは近代人が反省的/反照的に発見する“自然人”の信仰であるという意味で、やはり近代主義の亜種としてのロマン主義と見なされるべきものなのか。そして/あるいは、なにゆえ彼は結局、プラトンやアリストテレスよりもテオプラストスやプルタルコスを愛読し続けたのか——。

レオ・シュトラウスのルソー解釈は、政治、政治哲学、そして哲学相互の関係性を軸に据えつつ、ルソー読解の困難に対して、解ではないにせよ、一定の輪郭や見取り図を与えてくれることが期待される。そこでわれわれは、二世紀を隔てたこの二人の哲学的構えが驚くほど似通っていることを見るだろう。

共通論題「ルソーという問い」第五報告
孤独のアノマリー —— ルソー／真理／政治 ——

佐藤淳二(京都大学)

報告要旨

「無政治的なものの政治的な活用」(レオ・シュトラウス)——自然状態には、当然ながら社会は存在しない。しかるに、自然状態の人間も人間である。従って、人間は「政治的動物」ではない。ホブズからルソーに至る亀裂は、政治学における巨大な切断線であり、ここから本当の意味で近代は開始されたといえよう。それは通常考えられているような、「個人主義」の成立によるだけではない。孤独は、もっと深いのではないか。徹底した分散と孤独にある自然状態の人間には、ポリスは不在であり、いかなる政治 *politique(s)* も不可能であるはずだ。真理も共同体もない、歴史もそもそも未だ無いのだから共同主観性も成立しようがない、こういったナイナイづくしの白紙状態が、ルソーの政治論の根源に蟠っていることを、人はあまりにも容易に忘れてしまう。では、この不在からいったい何が導き出されるのだろうか。一方では、この不在を核として新しい自己像が構築されたと言えるだろう。それは、ルソーの文学、とりわけ彼の演劇論、『新エロイーズ』、そして何より『夢想』に極まる自伝テキストに示されるだろう。しかし、文学や自伝の検討には、今回は立ち入ることはできない。ここで検討したいのは、それとまた別の方向性である。それは(無)政治的なものの領域といえよう。この観点からすると、ルソーの政治学はますます謎めいてくるかもしれない。そもそも「一般意志」(一切の具体的な「文」を語らないかに見える謎のコンセプト)を中心とした政治理論の展開を追うのは容易ではない。それは、ルソーほど、政治権力の中枢に「不在」を見てとった思想家が稀だからではなかろうか。この「不在」の確認、孤独のアノマリーの把握が求められる所以である。そこで、最近の研究(例えば、かつての存在論的な読解から転じて、自伝テキストに「世論」(共同主観)との関係という「政治」を読み取ろうとする J=Fr・ペランなど)を踏まえつつも、異様な集中度を見せるルソーの政治理論(と実践)を別角度から考察する。政治の不在(無政治)による政治という逆説的な様相を示すルソーの政治理論、これを確認することが目的となる。